子ども未来学研究　2016年　第11号　pp. 57-66

一昔前の子どもの歌で体験する自然

―― 教育や保育に活かす ――

田　中　俊　明

要　旨

一昔前の子どもの歌のなかには、日本の自然の美しさ、人と自然とのかかわりを心豊かにうたった歌がたくさんある。こうした歌が時代の流れの中で忘れ去られてしまうのは残念なことである。たとえ忘れ去られはしないとしても、それらの歌を子どもたちが実体験なしに、想像の中で歌うだけでは不十分である。歌の中の自然を実際に見たり感じたり、体験することで子どもたちの心は豊かになるし、今後の教育や保育にも活かせるということについて、歌の中の自然を体験する視点や方法を紹介しながら考察した。

キーワード：童謡，唱歌，自然，教育，保育

1. はじめに

「故郷（ふるさと）」（作詞：高野辰之，作曲：岡野貞一）という歌がある。ある年齢層以上の日本人がこの歌を聞けば、遠い懐かしさを感じて、子どものころに山や川で遊んだ情景が脳裏に浮かんでくるのではないだろうか。「故郷（ふるさと）」という歌は、父母に守られ、山や川で友と共に生きものたちと遊んだ体験をとおして形成された、自然の風景と混然一体となった感情がうたわれている。ふるさとの風景は、心の奥に広がる原風景となる。「兎追ひしかの山　小鮒釣りしかの川」という原風景のなかでの原体験は、その人の記憶の深層に堆積し、「夢は今もめぐりて　忘れがたき故郷（ふるさと）」、「雨に風につけても　思ひ出づる故郷（ふるさと）」という心の核となり、大人になった後のものの見方や考え方、感じ方など知性や感性のはたらきに大きな影響をおよぼす。さらに、心に安心をもたらす拠り所ともなり、その拠り所にしっかりと根を張り、「志をはたして　いつの日にか帰らん　山は青き故郷（ふるさと）　水は清き故郷（ふるさと）」という自立して生きる力を育む。

人間も含めて動物個体の脳や身体は、環境に適応した行動をとるように進化してきた。個体の脳や身体は閉じたシステムではなく、環境と関わりあうための開かれたシステムである。遺伝子の表現型というものは、その個体の身体には限定されずに、その外部の環境へと拡張されるし（ドーキンス　1987）、心や知性というものも、脳や身体の中に限定されるものではなく、外部の環境へと拡張されるということも近年言われるようになってきた（例：クラーク　2012，バレット　2013，鈴木　2016）。心の在り処について、脳・身体・環境の境界をはっきりと線を引いて分けられるものではないし、心というものは、脳・身体・環境がたがいに密接にかかわりあ

い影響をおよぼしあう関係性のなかから創発してくるはたらきであるとも考えられる。こうした視点から子どもたちの豊かな心の成長を考えると、子どもたちがどのような外部の環境といかにかかわって育つのがよいのかを吟味することが重要になってくる。例えば、脳や身体への刺激が限定された環境、言い方を変えれば、楽で快適で便利な人工的環境にかかわるだけでは、子どもたちの人間らしい豊かな心の成長は制限されてしまうだろう。楽で快適で便利な文明の利器に頼って、脳や身体を使わなければ、それらのはたらきは健全に育たない。また、文明の利器は何でもしてくれるので、外部の環境と深く大きくかかわって主体的に生きることが難しくなるのは自明の理である。一方で、楽で快適で便利な環境があれば、それにどっぷりとつかって抜け出せなくなるのも人間らしい悲しい性であると言えてしまうところもある。ただそうは言っても、楽で快適で便利な文明は、必ずしも人々の心を満たしてくれないし、時として人間に不幸をもたらすこともありうる（佐倉　2013）。やはり、人間らしい豊かな心の成長のために、子どもたちがどのような環境といかにかかわって育つのがよいのかを吟味する上で、「故郷（ふるさと）」の歌の時代の、単に楽で快適なだけではない、不便もある、多様な刺激に満ちた環境で育った一昔前の子どもたちの姿は、ひとつの指標となると考える。また、ふるさとの身近な生きものたちに親しみそれらに対する共感を育むこと、身近にある山や川がつくりだす風景（ランドスケープ）につつまれて遊び、居心地の良さを感じる時間や機会をもつことで、それらの風景と強い心の結びつきを形成することは、教育・保育におけるエコフォビア（環境への無関心・忌避）を引き起こさないような環境教育の方向性とも合致する（ソベル　2009）。

「故郷（ふるさと）」の歌のみならず、一昔前の子どもの歌には、子どもたちが身近な自然に深く大きくかかわり、さまざまな意味を見出して、人間らしい豊かな心を成長させるためのヒントが詰まった歌がたくさんある。本論文では、それらの歌を関連のある風景ごとにまとめて、身近な自然とかかわる視点や方法を紹介しながら、人間らしい豊かな心の成長について考察する。

2. 散歩で出会う風景

自然の風景を感じる一番簡単で楽しい方法は散歩であろう。「五月の歌」（作詞：オーヴァベック，作曲：モーツアルト，訳詞：青柳善吾）でも、「楽しや五月　草木は萌え　小川の岸に　すみれにおう　やさしき花を　見つつ行けば　心もかろし　そぞろ歩き」と春のそぞろ歩き（散歩）の楽しさが美しくうたわれている。生活圏からそれほど遠くないところを散歩しても、四季を通じてなにかしら自然に出会うことができる。公園や緑地、海辺、川沿いの歩道から田畑の広がる里山まで、全国どこでもどこか良いコースが見つかるはずである。いつでも気軽にできるし、道草食ったり、寄り道したり、興味のおもむくままに自由に歩ける楽しさがある。ぶらぶら歩くのが目的なのだから、目的地にたどり着けずに途中でやめてもよい。生きものたちや風景との思わぬ出会いや発見があるし、歩いているうちに心も軽くなる。

近くになじみの道やなじみの場所をつくって頻繁に出かけてゆくのがよい。新しい場所では慣れないのでなかなか自由になれないが、いつも来る慣れた場所ではより自由になれる。また、よ

く知っている場所であればそれだけ危険も予測できるのでより安全に歩ける。できればなじみの道や場所を歩いているときに、ポケットにノートとペンを入れておき、いつどこでどんな自然や生きものに出会ったかを記録して、後で地図に落としてみると、四季を通じてどこでどんな自然に出会えるかがわかる。そうして作成したなじみの道や場所の自然マップは、教育や保育において、身近な自然と子どもたちを結びつけるための活動を考える上でアイデアの尽きせぬ泉となる。さらに、自然マップを毎年更新していけば、その場所の自然の経年変化もわかる。

幼児の散歩の歌としては、「お手(てて)つないで　野道を行(ゆ)けば　みんな可愛(かわ)い　小鳥になつて　歌をうたへば　靴が鳴る」の「靴が鳴る」（作詞：清水かつら，作曲：弘田龍太郎）がある。子ども期初期の子どもたちは、対象を観察するより対象になりきってしまうことを好むことが指摘されているが（ソベル　2009)、この歌にはそうした幼い子どもの気持ちがよく表現されている。幼児の知覚は、主観的、情緒的で、事物を事物としてとらえず人格化してとらえ、人と共通した表情や運動を持つ対象として知覚することが知られている。このような知覚は相貌的知覚と呼ばれている（東ほか　1978)。相貌的知覚は、幼児の精神構造が未分化であるためにおこるといわれているが、小鳥になりきって歌をうたえるような相貌的知覚があるからこそ、幼児に身近な自然や生きものに対する共感を育むという面を見逃してはいけないだろう。この自然や生き物に対する共感は、将来自然科学への興味や環境保全への意識を高める感情面での土台となるのだから。

3. 川の風景

「(一）春の小川はさらさら流る　岸のすみれやれんげの花に　匂いめでたく　色うつくしく　咲けよ咲けよと　ささやく如く　(二）春の小川はさらさら流る　蝦やめだかや小鮒の群に　今日も一日ひなたに出でて　遊べ遊べと　ささやく如く　(三）春の小川はさらさら流る　歌の上手よいとしき子ども　声をそろえて小川の歌を　歌え歌えとささやく如く」と「春の小川」（作詞：高野辰之，作曲：岡野貞一）は、自然に触れる心地よさをさらさらとよどみなく軽やかにうたう。「春の小川」や「故郷(ふるさと)」、「五月の歌」の歌にあるように、小川や川など水辺には魚やエビ・カニなどの水生生物をはじめ、トンボやチョウなどの昆虫、鳥や草花など生きものたちでにぎわい、子どもたちにたくさんの原体験を与えてくれる。筆者も子ども時代は栃木の田舎の中上流域で川ガキとして育った。湧水池ではスナヤツメやゲンゴロウ、小川ではメダカやドジョウ、カエルやサワガニ、川ではカジカやヤマメ、アユやウグイなどと遊んだ。捕まえた魚は川原の石を組んでかまどをつくり、流木を燃やして焼いて食べた。橋や岩から飛び込んで勇気を試した。泳いで寒くなったら岩場に寝転がって甲羅干しをした。いまでも思い出すと川遊びをした感覚が身体にありありとよみがえってくる。川と子どもの親しい関係が失われつつある現在の状況は、人間らしい豊かな心の成長という点からみると残念なことである。全国の小川（用水路）や河川は、高度経済成長期にコンクリートで固められたり、汚染されたりして生きものたちでにぎわうかつての美しい景観が失われてしまった。しかしながら、その後の汚染を防止する法の制定、環

境保全の意識の高まり、親水空間をつくりだす地域の取り組みなどから、美しい河川の景観や生きものたちの営みが復活したところが少し増えてきたように感じる。大人がその気にさえなれば、川と子どもの親しい関係もそろそろ復活させることができるのではないだろうか。

4. 海の風景

一昔前の海の歌といえば「椰子の実」（作詞：島崎藤村，作曲：大中寅二）の歌が第一にあげられるだろう。「名も知らぬ遠き島より　流れ寄る椰子の実一つ　故郷（ふるさと）の岸を離れて　汝（なれ）はそも波に幾月」、遠き島から流れ着いた椰子の実に、漂白の身である自分を重ねて郷愁をうたった美しい抒情歌である。海辺には椰子の実など木の実だけでなく、たくさんのものが流れ着く。貝殻、サンゴ、ウニ、ヒトデ、海藻、魚、動物の死骸、骨、流木、石、砂、摩耗したガラスのかけら、漁や釣りの道具、日本のほかの場所や外国から流れ着いたゴミや生活用品など。こうした漂着物を拾って「椰子の実」の歌のようにその物の来歴を想像したり、推理したりするのは子どもでも大人でも胸が踊る楽しみである。漂着した自然物を通して自然について調べることもできるし、博物標本のコレクションもできる。ゴミや生活用品など人工の漂着物を通して生活や文化、社会や環境について思いをめぐらすのもよい。藤村のように漂着物に着想を得た文学作品をつくってみてもおもしろい。音楽やアート作品だってつくれるし、拾ったものを集めて工作をしても楽しめる。こうした遊びはビーチコーミングと呼ばれている。発想次第で漂着物にさまざまな意味を見出すことができる。漂着物をとおして海とその向こう側に広がる世界に対して深く大きくかかわることができる。

海の歌としては「我は海の子」（作詞者・作曲者不詳）がある。「（一）我は海の子白波の　さわぐいそべの松原に　煙たなびくとまやこそ　我がなつかしき住家なれ　（二）生まれて潮にゆあみして　波を子守の歌と聞き　千里寄せくる海の気を　吸ひてわらべとなりにけり　（三）高く鼻つくいその香に　不断の花のかをりあり　なぎさの松に吹く風を　いみじき楽と我は聞く」と、海と一体になって遊んで育つ子どもたちの姿がいきいきとうたわれている。海で泳いだり、磯でいろんな生きもの見つけたり、捕まえた魚貝を浜辺でたき火して食べたり、元気な一昔前の子どもたちの姿が想像される。上記の川ガキの海バージョン、海の子たちの姿である。現代では考えられない自由で元気な子どもたちの姿が思い浮かぶ。海の子や川ガキたちをもういちど取り戻すことはできないのだろうか。子どもたちをあまり自由に放任しすぎて死亡事故が起こるようなことは避けねばならないが、だからといってあまりに過保護にしすぎては外部の環境と主体的に関わって生きる力は育たなくなる。要はバランスが大事なのだ。現代の日本社会はそのバランスが過保護の方に傾きすぎているように感じる。過保護は、何かをするときにそのやり方や対処方法をよく知らず、なおかつ失敗できないようなことをしなければならない時におこることが多いのではなだろうか。例えば、ある大人と子どもが山へ遊びに行ってシマヘビに出会ったとする。その大人がヘビのことをよく知らなかった場合、万が一子どもが毒ヘビにかまれたら大変なことになるから子どもをヘビから遠ざけるだろう。しかし、シマヘビが無毒のおとなしいヘビで

あることを知っている大人ならば、そのヘビを捕獲して子どもといっしょにじっくり観察したりするかもしれない。子どもの安全管理のバランスをとり過保護をさける一つの方策として、親や教育・保育者などが、身近な自然をよく理解し、そこで遊んでいるときに出会う可能性のある危険への対処法を熟知して、それを子どもにきちんと教えることがあげられる。大人が子どもの将来までの危険を全て排除することは不可能である。近所のガキ大将が消えてしまった現代において、子どもに危険への適切な対処法を教えるのは大人の役目であろう。また、子どもは自然の中でたくさんの時間を過ごし、小さな危険をいくつも経験するうちに、子どもなりに責任をとり危険に対処する力を身に着けていくものである。危険だけに限らず、自然の中では楽で快適で便利な人工的環境では必要のないような、さまざまな思考や判断が求められる。こうした無数の経験の積み重ねは、「我は海の子」や「故郷（ふるさと）」の歌にあるような子どもたちの生きる力を育むことにつながると考える。

5. 空の風景

一昔前の子どもの歌には夕方の空をうたった歌が目立つ。比較的有名な歌としては、「夕焼け小焼けの赤とんぼ」の「赤とんぼ」（作詞：三木露風，作曲：山田耕作）、「夕焼け小焼けで日が暮れて」の「夕焼け小焼け」（作詞：中村雨紅，作曲：草川信）、「ぎんぎんぎらぎら夕日が沈む」の「夕日」（作詞：葛原しげる，作曲：室崎琴月）、「秋の夕日に照る山もみじ」の「紅葉（もみじ）」（作曲：岡野貞一，作詞：高野辰之）などがあげられる。そのうち「夕焼け小焼け」と「夕日」は、夕日とカラスの取り合わせや夕焼け空にただようしみじみとした情趣が、枕草子（1962）にある「秋は夕暮れ　夕日のさして　山の端　いと近うなりたるに　からすの寝どころへ行くとて　三つ四つ　二つ三つなど飛び急ぐさへあはれなり」という文章と重なるところがある。他の「赤とんぼ」や「紅葉」にしても、夏の終わりから秋の初めにかけて、アキアカネなど赤とんぼが夕焼け空を群飛する里山の風景、秋の澄んだ空気を通り抜けて射し込む夕日に赤く照らされてさらに赤く色づく紅葉の山の風景と、秋の夕暮れに感じる情趣は枕草子と通じ合う。一日の終わり、明るい昼から暗い夜に移り変わる端境の時、沈む夕日に哀愁や郷愁、無常を感じるのは、昔から日本人に受けつがれてきた美意識なのであろう。さらに、夕日に「あはれ」を感じているかどうかは不明であるが、野生のチンパンジーが樹に登って枝に座り込み、沈んでいく太陽、染まっていく夕空をずっと眺めていたという報告もある（鈴木　1992）。もしかしたら夕日の美しさに感動する心は、はるかに古い時代から受け継がれてきているのかもしれない。ひるがえって現代日本の子どもや大人たちのなかに日々夕日を眺めて心を動かされている人がどのくらいいるのだろうか。「夕焼け小焼け」に「おててつないでみなかえろう　からすといっしょにかえりましょ」と「夕日」に「まっかっかっか空の雲　みんなのお顔もまっかっか」とあるように、一昔前の子どもたちはみんなで日が暮れるまで夢中になって遊んだあと、夕焼けを眺めながら家に帰った日々の姿がうたわれている。まさにこのような環境の中から人間らしい豊かな心が育ってゆくのだと考える。毎日は無理にしても、なるべく日が暮れるまで、子どもたちの顔が夕日で真っ赤に染ま

るまで遊ばせてあげたい。

夜空に関連した子どもの歌も目立つ。「菜の花畠に入り日薄れ　見わたす山の端　霞ふかし　春風そよふく空を見れば　夕月かかりて　におい淡し」の「朧月夜」（作曲：岡野貞一，作詞：高野辰之）、「出た出た月が」の「月」（作詞者・作曲者不詳）、「ささの葉さらさら のきばにゆれる お星さまきらきら きんぎん砂子」の「たなばたさま」（作詞：権藤はなよ・林柳波　作曲：下総皖一）など、たくさんある。月見や七夕に代表されるように夜空を眺める文化も日本人に昔から受け継がれてきた。しかし、明るい電気の明かりが夜空を照らす現代においては、夜空を眺める文化も失われつつある。とはいえ、本来夜は暗いものである。その暗闇のなかで輝く月や星を眺めることで育まれる人間らしい心もあることを忘れてはならないだろう。カーソン（1996）の「センス・オブ・ワンダー」に、そのことを示す美しい文章がある。「夜ふけに、明かりを消したまっ暗な居間の大きな見晴らし窓から、ロジャーといっしょに満月が沈んでいくのをながめたこともありました。月はゆっくりと湾のむこうにかたむいてゆき、海はいちめん銀色の炎に包まれました。その炎が、海岸の岩に埋まっている雲母のかけらを照らすと、無数のダイヤモンドを散りばめたような光景があらわれました。このようにして、毎年、毎年、幼い心に焼きつけられてゆくすばらしい光景の記憶は、彼が失った睡眠時間をおぎなってあまりあるはるかにたいせつな影響を、彼の人間性にあたえているはずだとわたしたちは感じていました。」もう説明は不要であろう。たまには部屋の電気を消して、子どもと一緒に夜空を眺めるのを恒例の行事にしたいものである。

6. 雨と雪と北風の風景

気象をうたった子どもの歌はけっこうあるが、ここでは雨と雪と北風をうたった歌をとりあげる。雨をうたった楽しい歌として「あめふり」（作詞：北原白秋，作曲：中山晋平）が真っ先に浮かぶ。「ピッチピッチ チャップチャップ　ランランラン」と大好きなお母さんと一緒に雨の中を長靴で水たまりを踏みながら帰る子どものうきうきとした気持ちが伝わってくる。「雨がふります　雨がふる　遊びにゆきたし　傘はなし　紅緒の木履（かっこ）も緒が切れた」という同じ北原白秋作詞の「雨」（作曲：弘田龍太郎）という歌もあるが、外で遊ばなければ雨であろうと晴れであろうとあまり関係ないだろう。外で遊びたいからこそ雨の憂鬱を感じるし、ままならない自然と向き合うからこそ耐え忍ぶ強い心も育まれる面もある。とはいえ、雨だからこそ楽しい、ままならない自然を楽しむという前向きで元気な子どもの心を育ててあげたい。そんなままならない気象を楽しむ歌の代表として「雪」（作詞者・作曲者不詳）がある。「雪やこんこ　あられやこんこ　降っても　降っても　まだ降りやまぬ　犬は喜び庭かけまわり　猫はこたつで丸くなる」と歌詞に子どもは直接出てこないが、喜んで庭をかけまわる犬のように、この歌をうたって外へ飛び出し、雪遊びをしてわくわくと心をときめかせた一昔前の元気な子どもの姿が想像される。もうひとつ別のままならない気象、北風を楽しむ歌として「たき火」（作詞：巽聖歌，作曲：渡辺茂）があげられる。「かきねの　かきねの　まがりかど　たき火だ　たき火だ　おちばたき　あたろ

うか　あたろうよ　きたかぜぴいぷう　ふいている」とあるように、北風がぴいぷう吹いているからこそ、みんなであたるたき火の暖かさをしみじみと感じることができるのである。感情が動くのである。楽で快適で便利な人工的環境にかかわるだけでは、子どもたちの人間らしい豊かな心の成長は制限されてしまうと上述したが、思い通りにならない自然とかかわるからこそ育まれる人間らしい心があることも、教育や保育や子育てにおいて欠かせない視点であろう。

7. 生きものたちの風景

「故郷（ふるさと）」や「春の小川」でうたわれた時代の里山の風景は、その後の農林業の変化、過疎化、外来生物などさまざまな原因からだいぶ変貌してしまった（高槻　2014）。しかしながら、変貌した風景の中でも、どっこいたくましく生きている生きものもたちも、まだまだたくさんいる。「手のひらを太陽に」（作詞：やなせたかし，作曲：いずみたく）のように、その気になりさえすれば、都会でも田舎でも、血潮がまっかに流れる手のひらをもつぼくたちと生きものたちとの親しい友だち関係を結ぶことはできる。そんな関係の中で、生きているから悲しい、生きているからうれしい、生きているから愛することを感じることができる。生きものがでてくる歌はたくさんあるので、ここでは現代の子どもと生きものとの良いかかわり方を示唆できるような歌に限って紹介する。

昆虫からは、「虫の声」（作詞者・作曲者不詳）のマツムシ、スズムシ、コオロギ、クツワムシ、ウマオイなどの鳴く虫たち、「とんぼのめがね」（作詞：額賀誠志，作曲：平井康三郎）や「赤とんぼ」のトンボ、「蝶々」（作詞：野村秋足・稲垣千頴，作曲：スペイン民謡）のチョウ、「ほたるこい」（作詞・作曲：わらべ歌，編曲：坊田かずま）や「蛍の光」（作詞者不詳，作曲：スコットランド民謡，編曲：中田喜直）のホタルをとりあげる。

秋の夜に、川の土手、公園、緑地、田畑の周り、空き地など、草原や藪のある所に行けば、「虫の声」にでてくるような鳴く虫たちのいろいろな声が今でもけっこう聞こえてくる。昔から日本人は虫の音（鳥の声も同じ）を楽しむ文化を受け継いできたが、現在でも聞く耳さえもてば文字通り「ああおもしろい　虫のこえ」なのである。秋の夜長に近所の草原や藪のある場所を散歩してみてはどうだろうか。鳴く虫を採集して飼育してもよい。

目線の低い子どもたちでも虫はすぐに見つけられるし、一昔前の子どもにとって、トンボやチョウをはじめとしたさまざまな昆虫は身近な存在であった。「赤とんぼ」の歌のように、竿の先にとまっているトンボの目の前で指をくるくる回して捕まえて遊んだものである。大きくて速いヤンマやアゲハが欲しくて夢中になって追いかけた。虫好きの解剖学者である養老孟司（池田・養老・奥本　2011）は、「虫を見つけて、身体を動かして捕まえて、標本にして調べて、考えて、また虫を捕りに行く。しかもそれを、自然の中でやらなきゃいけない。脳の発達のためには最適ですよ。」と述べているが、保育や教育において、身近な自然にいかにかかわるか、虫（魚にも同じことがいえる）など子どもに身近な生きものとの知恵くらべの中で子どもの知性は磨かれるという視点を忘れてはいけないだろう。また、虫や魚を採ってよく調べることで、虫や魚をもっ

と好きになり、虫や魚やそれらのすむ環境についての理解も深まり、ひいてはそうした環境を保全する意識も高まるだろう。矛盾しているようだが、子どもが虫や魚を採って遊ぶことは、将来的に虫や魚を保全することにつながると思う。もっと子どもに虫や魚を採って遊ばせてもよいのではないだろうか。

枕草子の昔から日本人に身近で親しまれてきたホタルも、環境破壊により一時期その数を減らした。しかし、各地で保全の取り組みがなされるようになって近年復活の兆しを見せている。初夏になったら、ぜひ近くのホタルがいる場所を探して子どもを連れて行くとよいだろう。その際には、上記の夜空を眺めるときとおなじで、ライトを消して暗闇のなかで観察するようにしたい。そうすれば、蛍の光で書(ふみ)を読む、「蛍の光」の歌の世界が理解できる。

魚からは、「めだかの学校」（作詞：茶木滋，作曲：中田喜直）や「春の小川」のメダカをとりあげる。メダカは目高と書くが、水面近くでくらし、水面に漂う餌を見つけやすく食べやすいように、目も口も上についている（岩松　2002)。「めだかの学校」は、水面をメダカが群れて泳ぐのをそっとのぞいて見る様子をうたっている。メダカの群れは各個体がそれぞれ生き残るために集まった結果として、まとまった動きをしているだけで、特に群れをリードする先生はいない。これはスズメなどの群れにも同様に言える（上田　1990)。この意味では、先生と生徒の区別がつかない「めだかの学校」は生物学的には正しく、先生が子どもたちを率いる「雀の学校」（作詞：清水かつら、作曲：弘田龍太郎）は誤りとなる。昔はどこにでもいたメダカは、人間活動の影響を強く受けて生息数が激減し、絶滅危惧種に指定されている（岩松　2002)。しかしながら、一部の地域では、コンクリートで固められた用水路や生活排水が流れ込むドブ川でもかろうじて生き残っているメダカの姿をまだ見かける（フナやエビなどもまだいる)。子どもたちとこのような現代のメダカの学校をのぞいてみる必要もあるのではないだろうか。

鳥からは、「七つの子」（作詞：野口雨情、作曲：本居長世)、「夕焼け小焼け」、「夕日」のカラス、「鳩」（作詞者・作曲者不詳）のハトをとりあげる。普段よく見かけるカラスには二種類ある（三上　2015)。くちばしの太いハシブトガラスと細いハシボソガラスである。ハシブトガラスは主に街中、ハシボソガラスは主に開けた公園、田畑、河川敷などにいることが多い。カラスを見かけたらどちらのカラスか見比べてみよう。カラスのねぐらは基本的に決まっており（上田　1990)、夕方ねぐらに帰る様子が上記の歌にうたわれている。普段よく見かけるハトにも2種類ある（三上　2015)。ドバトとキジバトである。例外はあるが、ドバトは群れて行動するが、キジバトは単独あるいは2、3羽で行動している。よく町の公園でたくさん群れているのがドバトである。「鳩」の歌に出てくるのはドバトであろう。キジバトはドバトに比べて目立たないが、鳴き声は「デーデーポーポー」と目立つ。この声を聞いたことのある人は多いのではないだろうか。鳥は飛んで逃げるし、小さいものが多いので、ちいさな子どもにとっては見つけるのが難しい。カラスやハトやカモの仲間など、人が多い場所で人馴れした鳥、近づくことができる鳥ならば小さな子どもでも興味をもちやすい。

春に咲くスミレがでてくる「春の小川」や「五月の歌」、秋に咲く薄紫色のキク（カントウヨメナ、ヨメナ、ノコンギクなど）がでてくる「野菊」（作詞：石森延男，作曲：下総皖一）など、

季節と植物をうたった歌は多い。スミレや野菊をはじめ、道端や公園などで見かける野草の中には、可憐で美しい花がたくさんある。花だけでなくイネ科やカヤツリグサ科などの野草の穂にも美しい造形をしたものがたくさんある。もっと野草に目を向けてみると思わぬ美しさを発見して心が豊かになること請け合いである。身近な野草が、雑草として除草剤をまかれたり刈られたりしてしまうのは惜しいものである。近年、幼稚園や小学校でビオトープをつくるところが増えているが、一番手軽なビオトープづくりは、園庭や校庭の隅の雑草を刈らないでそのままにしておくことである。特に手入れをしなくても、放っておけばいろんな野草が生えてくる。草があればそれを利用する虫が集まり、虫を食べる虫や小鳥が集まりといったように、生きものが豊かな場所、つまりビオトープになる。子どもたちはそこで花を摘んだり実で遊んだり自由にできる。

8. おわりに

生きものである人間の脳や身体の遺伝的変化のスピードは万年単位のゆっくりとしたものであり、現代の人間が自らを取り巻く環境を改変してゆく日進月歩のスピードにはついてゆけない。教育や保育や子育てにおいて、人間らしい心がどのような環境といかに関わることで健全に育つのかを意識的に考えることは、AI の日常生活への浸透に象徴されるように、今後子どもたちを取り巻く環境がますます楽で快適で便利な環境に変化してゆくことが予想されるなかで、きわめて重大な課題であると考える。これまで述べてきたように、日本の自然の美しさや人と自然とのかかわりをうたった一昔前の子どもの歌には、この課題を考えるうえでのヒントがたくさん詰まっている。こうした歌が時代の流れの中で忘れ去られてしまうのは残念なことである。たとえ忘れ去られはしないとしても、それらの歌を子どもたちが実体験なしに想像の中で歌うだけでは不十分である。歌の中の自然を実際に見たり感じたり、体験してこそ子どもたちの心は豊かに育つのだ。

文献

東洋・大山正・託摩武俊・藤永保（編） 1978 『心理用語の基礎知識』 有斐閣
岩松鷹司 2002 『めだかと日本人』 青弓社
上田恵介 1990 『鳥はなぜ集まる？ 群れの行動生態学』 東京化学同人
カーソン , R. 上遠恵子（訳）『センス・オブ・ワンダー』 新潮社
クラーク，A. 池上高志・森本元太郎（監訳） 2012 『現れる存在 脳と身体と世界の再統合』 エヌティティ出版
佐倉統 2013 『「便利」は人を不幸にする』 新潮社
鈴木晃 1992 『夕陽を見つめるチンパンジー』 丸善ライブラリー
鈴木宏昭 2016 『教養としての認知科学』 東京大学出版会
清少納言／池田亀鑑（校訂） 1962 『枕草子』 岩波文庫
ソベル，D. 岸由二（訳） 2009 『足元の自然から始めよう』 日経 BP 社
高槻成紀 2014 『唱歌「ふるさと」の生態学 ウサギはなぜいなくなったのか？』 山と渓谷社

ドーキンス，R.　日高敏隆・遠藤知二・遠藤彰（訳）1987『延長された表現型　自然淘汰の単位としての遺伝子』紀伊國屋書店

バレット，L.　小松淳子（訳）2013『野性の知能　裸の脳から、身体・環境とのつながりへ』インターシフト

三上修　2015『身近な鳥の生活図鑑』ちくま新書

養老孟司・奥本大三郎・池田 清彦（監修）2011『ぼくらの昆虫採集』株式会社デコ